

常樂我淨について

土 橋 秀 高

涅槃の徳たる常・樂・我・淨は四倒對治の上に彰される。この四徳の如き尤より有佛無佛法相常住のもの、畢竟得て對治の四倒に依存するものでない。しかし教化は常に四倒の波亂中に於てであり畢竟涅槃と云つて惑亂の衆生に縁なくば空理空論である。涅槃への行者の領解に自づと妙波亂が描かれてくるので、その影をたどつてみることとは大きな意味のあることで涅槃經研究自體にとつても重要なことである。今こゝでは涅槃經に四徳が説かれるに至るまでの顛末を推考してみたいと思う。

阿含には三法印として種々の句がある。和辻博士は三つの根本概念が初めで、それを同一概念として關係づけられたとみられる。個々の概念が先で統一が後か、或はその逆かは簡単にきめられない。假に初め「病・癰・刺・殺・無常・苦・空・非我」等の如く難然と説かれていたものが五想、七想、九想、十想と纏められ、更にその整理途上に通俗、具象的な行儀の形をかりて秩序立ててゆき獨自の四念處觀ができたとみよう。一面では論理的な構想をかためて種々の三法印の相關概念が説かれる。この二系列が阿毘達磨論書で統合され俱舍論の如き四念が行處・無常・苦・無我が行、相と説かれるに至るのである。

阿含に於て外道と佛説との四念處觀の差異が問われたり、或は不

淨觀は愚人で無常・苦・無我觀は智者の行であるとの説があるのは前者が具象且通俗的な實踐法であり後者が佛陀自覺の緣起觀に直接しそれによつて眞に佛道たるの面目が與えられることを顯わしている。阿毘達磨に於ける統合も正しくこの趣旨である。

また緣起の實相たる諸行無常・諸法無我的事實判斷は一切皆苦・寂滅爲樂の價值判斷と、無常の反面緣起の法相常住の義と、更に無我即ち非我非無我との三義に直結されておりこれを空と説く。或は苦と樂の價值判斷が交互に顯されるなど種々の系列が示されるがこれらすべては後に無常・空・無我・非淨と統一されてゆくのである。さてその價值判斷としての涅槃の徳であるがそれは緣性の空理に於て有爲の無常・無我・苦に即する有として含まれている。しかも法身・法性に常住が、涅槃に寂滅樂が、解脱に清淨が説かれ、いづれにいづれを語つて支障なきにかかわらず、未だ體系的なものを開陳するに及んでいない。阿含では涅槃の個々の徳(常住・清淨・樂)が拾われるに過ぎない。

上述の如く阿毘達磨では阿含を受けて二系列を統合する。殊に大婆沙には空・無相・無願の三三昧に空・非我、滅・苦・非常を配し或は四念處と無常・苦・無我との連關を説く。婆沙が念處の所緣中に常住不變の滅諦涅槃を加えて無相三昧としている如きは原始經典で個々分説の域を出なかつた「有爲から無爲へ」が體系づけられていることを意味する。

大乘經典では維摩經が注目される。ここには無常・苦・空・無我・寂滅を數え、阿含に云う無常・無我と常住・非無我的な形がある。維摩は四念處を行處としつとも行處行相に固泥せず空不二に徹せよと教える。同じように授幻師跋陀羅記會は如來と衆生の無差

別觀から常住の德を説くが依然第一義空隨世俗說涅槃の域にある。無盡意菩薩品も無常・苦・無我・寂滅を空無所有で統攝しており、共に維摩を出ない。

これと規を一にして龍樹の論書がみられる。中論の觀如來・顛倒・四諦・涅槃の所論は從來の四諦四念處觀への大乘空觀による批判であり、また涅槃經如來性品・聖行品の二箇處に述べられる涅槃四倒四諦の論據とみられる。八顛倒の排除が中論の所顯であるに對し大論の特徴を云うと凡夫は常・樂・我・淨に執し二乘は常・樂・淨・實・我を見ず菩薩のみ一切の執を離れ、或は有と説き、或は無と説くも實法を得て違背しないと云う。この空・實の對配は涅槃經の佛性五義乃至七義中の實義と脈絡するものと推論される。かく大論は中論に比し有的であるが立場は第一義空・世俗有を出ない。この點後世成實論が無我想による常・樂・清淨を述べ滅諦の第一義有まで説くがなお全般は第一義空であること、更に楞伽經も亦同一空調である等その思想系を印せられる。

これに對し大乘空觀に基づく妙有的な經説を窺うと常と云えばすぐ樂・我・淨と一連に説かれそうであるが有爲の諸概念の上に曲折があつた如く涅槃・法身乃至解脱と個々の相から統一概念が導き出されてゆく。すなわち成實論が無我想を修し常・樂・清淨を得ると云つたり、常・樂・無我・淨という無我のみ轉換してない説等がそれを裏付けるであろう。古實積たる普明菩薩會で聖賢性・滅諦の德が「我」となつていない。異本宋譯では此處元少一葉梵文と註あり、その少し前で四顛倒を説く處に唯此涅槃具彼四德とあるが、四德は常樂・無我・淨であつたのだろうか既に「我」であつたのであろうか、兎に角成實論と併せ考へて涅槃經四德説への過渡期的な

のとして興味は深い。

更に進んでこれが如來藏思想になると涅槃の會座に自然と到達することになる。すなわち涅槃經に云う「無我是生死、我は如來、無常は二乘、常は如來法身、苦は一切外道、樂は涅槃、不淨は有爲法、淨は諸佛菩薩所有の正法」と如來藏系論書に引用される陀羅尼自在王經では空と無常・苦・無我・不淨を立體的にみて心性平等の面から心性本淨すなわち我淨を展開する。如來藏經には纏まつたものはないが四德は拾える。不增不減經になると經の意圖が斷滅の邪見を拂つて第一義諦甚深を顯さんとするものであるから如來法身の上で常淨或は常・樂・我が窺える。そうしてこれらの心性本淨、衆生界法界無差別義に基いて極めて独自の四念處觀を説いているのが實菩薩會である。それは身念處に如來無爲法身常住・清淨、受念處に無爲の涅槃畢竟樂、心念處の心性平等（これやがて佛性如來藏である）、そして法念處として法界無差別を觀すると云う。こゝまで説けば全く涅槃經説さながらである。

涅槃經はこのように原始から展開される思想を背景として説かれたものである。元來通俗的な實踐法であつた四念處に緣起の自覺を行相として點睛した。それが又次第に色あせて平面的な行目に凝固してゆく。この邪執を拂つたものが龍樹を頂點とする大乘佛教徒の空觀に基づく批判であつた。そうしてこれを論據として如來藏思想の上に涅槃觀を統攝確立したものが涅槃經の説であつたとみられる。以上簡略ながら涅槃經の四德の背景をみたのである。